8 月 21 日のメッセージ

聖書：エフェソの信徒への手紙　5： 21 – 6: 4

「互いに仕え合いなさい」

「鍛錬」という言葉で思い起こすのは、「獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす」という言葉です。ライオンは我が子を敢えて過酷な環境に入れ、その成長を促す。子どもの教育について語られるときに用いられるように思います。しかし、実はこの獅子は文殊菩薩の乗騎とされる古代中国の想像上の生き物で、ライオンとは別のものだそうです。現実のライオンは、谷に落ちた子どもを必死に助け出し、外敵に襲われたときには身を挺して守るといいます。

動物社会もそうなのですから、いつの時代も、どんな社会であっても、子どもは社会全体で守るべき存在だと言えるでしょう。

ところが、なぜか人間は、「子どものため」と言いながら、子どもの意思をないがしろにしてしまうことがあります。「よかれと思って」、レールを敷き、子どもの自由を奪ってしまうこともあります。ある意味で、子どもを親の所有物とみなしているから、そううそぶくことができるのかもしれません。そればかりか、大人をも、「子どもを持っている、持っていない」ことで区別し、差別することもあります(「……若いときの恥を忘れよ。やもめのときの屈辱を再び思い出すな。」イザヤ書 54:4)。人間の価値はそのような物差しで測ることなどできるはずもないにもかかわらず。

神はそのような人間の愚かさを打ち砕かれます(「恐れるな、もはや恥を受けることはないから。うろたえるな、もはや辱められることはないから。……」イザヤ書 54:4、「あなたの造り主があなたの夫となられる。その御名は万軍の主。あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神／全地の神と呼ばれる方。」イザヤ書 54:5)。

子どもは親の持ち物でもなければ、財産でもありません。子どもも含めて大人も、動物も、全ては神のものです(「見よ、子らは主からいただく嗣業。胎の実りは報い。」詩編 127:3)。一人ひとりが神に造られたもの、愛されているものとして存在しているのです。

そして、価値がないと思われているもの、弱いと思われるところにこそ、神は目を注がれます(「見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。」コリントの信徒への手紙一 12:24)。神のみと共に生きる子どもこそ、神の救いに近い存在と言われます(「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」マルコによる福音書 10:15)。

「わたしたちは、キリストの体の一部なのです。」(エフェソの信徒への手紙 5:30)

それゆえ、「家族だから」といって、子どもを、親を、パートナーを誰かの意思に従わせ、自由にできるはずなどないのです。だから、キリストに招かれ、愛される一人として、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」(エフェソの信徒への手紙 5:21)。

大人も、子どもも、家族の一人ひとりが、また、教会に集う一人ひとりが神に、キリストに感謝し、互いに認め合うことがまず大切です。そして、一人ひとりが一層輝くように、互いに高め合い、仕え合い、配慮し合って、交わりを重ねていくことが肝心です。

その時、家族は、また教会という神の家族は、さらに豊かな輝きを放つでしょう。神の愛を豊かに伝える群れへと造り替えられていくでしょう。